

# 大阪 ワイド



人類はいかにして痛みを軽くするか、そしてどのように人を痛みから解放するかを命題に試行錯誤を重ねてきた。現在、何らかの痛みに悩んでいる人に見れば、この世に痛みが存在しなければどんなに幸せなことだろうと思うに違いない。でも、痛みって本当に不要なものだろうか。

近大・森本教授の

## 痛み学入門講座

18



もりもと・まさひろ 平成元年、大阪医科大学大学院(麻醉科学専攻)修了。同大講師を経て、8年に近畿大学医学部麻醉科講師。22年から現職。医学博士。日本ペインクリニック学会理事。

### 先天性無痛症



イラスト 清水浩一

## 痛みって要らないの？

人は、体の内から外から「侵害刺激」(痛みを生じ)として経験し、それを記憶しているのだ。では、痛みを感知しない、痛みを経験しない場合にはどうなるのだ

ろつか。  
この痛みを感じず、危険から回避できない病気として「先天性無痛症」がある。「遺伝性感覚自律神経性ニューロパシー」(遺伝の様式、症状などからI-V型に分類されるが、IV型の「無痛無汗症」が多い)と呼ばれる疾患群がこれに当てはまる。生まれたときから痛み(内臓からの痛みも)を感じずに、自律神経の障害(発汗の低下ないしは消失、発作性の発熱)を伴う。わが国に多く、百人に一人の患者さんがいるとされる。  
久坂部羊さんの小説「無痛」(幻冬舎)に登場するイバラはこの先天性無痛症であり、「足首には渦巻き状のケロイドがあるが(中略)蚊取り線香が倒れて、足の上で燃えたためにできた火傷のあとである」と描かれている。イバラは、乳児期から、痛みを引き起こす危険(火傷など)から身を守る事ができずに育ってきたのだ。  
「予防注射を受けても泣かない」「入浴後や暑くても汗をかかない」として気付かれることが多い。歯が生える時期になると、歯で舌や唇、指を噛むといった自傷行為を起すようになる。その後は、けがによって皮膚を化膿させたり、さまざまな部位の骨折などを繰り返すようになる。  
温度への感覚も鈍い、ないしは消失していることから、ストーブなどに直接接触してもわからずに重篤な火傷を負ってしまう。また、内臓からの痛みを感じることができないために、「盲腸炎」や「腹膜炎」などが見逃されることが多い。併せて発汗機能の異常によって、体温を調節できずに発熱を繰り返すことも多い。  
慢性痛に苦しむ患者さんにこの話をすると、痛みがないことをうらやましがるかもしれない。確かに、慢性痛からの解放は医療の永遠のテーマである。一方で、痛みを感じないために重篤な合併症に悩み、生命の危険にさらされている人もいいる。ここでは、侵害刺激から身体を守ってくれる